

平成19年度血液凝固異常症全国調査のまとめ

平成19年度の血液凝固異常症全国調査は1,371施設(1,502担当部所)に調査用紙を送付し、平成19年5月31日時点における状況を報告して頂くよう依頼した。今回の調査期間は平成18年6月1日から平成19年5月31日までの1年間である。

新規に報告された症例の追加と、調査期間の死亡報告による減少を総合すると、平成19年5月31日現在で集計した日本全国に生存する血液凝固異常症の総数は、下表に示すように6,365人(HIV非感染例5,556、HIV感染例809)となった。この内、小児の血液凝固異常症の総数は1,166例であった。

日本全国における血液凝固異常症総数

	血友病A	血友病B	VWD	類縁疾患	小計
HIV非感染生存	3550	726	862	418	5556
(男性)	3523	719	394	231	4867
(女性)	27	7	468	187	689
HIV感染生存	609	189	7	4	809
(男性)	609	189	2	1	801
(女性)	0	0	5	3	8
HIV非感染・感染生存合計	4159	915	869	422	6365
(男性)	4132	908	396	232	5668
(女性)	27	7	473	190	697
AIDS発症(生存)	120	42	2	0	164
(男性)	120	42	0	0	162
(女性)	0	0	2	0	2
HIV感染死亡(累積)	477	136	1	8	622
(男性)	475	134	1	6	616
(女性)	2	2	0	2	6
HIV感染総数(生存および累積死亡)	1086	325	8	12	1431
(男性)	1084	323	3	7	1417
(女性)	2	2	5	5	14

調査期間におけるHIV非感染の死亡報告は17例、HIV感染の死亡報告は18例であった。HIV感染例では昨年度までに引き続き、HCVの感染が原因と考えられる重篤な肝疾患が死因である報告が多くを占めており、また、HIV非感染例においても17例中8例の主たる死因は肝疾患であった。

このような状況に対応して、Peg-インターフェロンによる治療が徐々に増加し、今回の調査では149例が報告された。この内118例はリバビリンとの併用療法で、HCVのRNAが消失し、かつ、肝機能が正常化した割合は56%であった。この値は、これまでの集計結果よりも高いものであった。HCV感染に対する治療は今後も積極的に行われて行く必要があるだろう。もちろん、現在の治療効果を上回る治療薬や、治療法の開発は是非とも望まれるところである。なお、今年度の報告を用いて、HIV非感染例におけるHCV抗体の有無と出生年との関係を5年ごとに集計したところ、陽性数が顕著に減少したのは1980年代以降であった。加熱製剤の導入以後に出生した患者においても少数ではあるが、血友病A、BともにHCV抗体陽性の報告が見られた。ただし、この要因を特定することは本調査では限界がある。

平成19年度の調査期間で新たなエイズ指標疾患の発症は1例、死亡時にエイズ指標疾患を有する報告は合計4例であった。また、今年度のCD4陽性細胞数の平均値は438/ μ L、HIVのRNAコピー数は測定感度未満が約65%であった。このように、HIV感染症例においては、HIVに関して比較的良好な状態が保たれていることが推定された。

抗HIV薬の使用状況に関しては、3剤以上による併用療法が7割以上の症例で実施されていた。リポジストロフィーと乳酸アシドーシスの有無については、有の割合はそれぞれ32%および1.7%で、昨年までと大きな違いはなかった。

血液凝固異常症全国調査は本邦における血液凝固異常症の全体を調査対象とし、その現状および問題点を把握するための唯一の調査であり、今後も調査票の回収率の向上に努めつつ、慎重な調査を継続して行きたい。